

平成 18 年度 課題研究成果報告書

平成 26 年 4 月 13 日現在

研究種目： I

研究期間：平成 18 年 4 月 ～平成 20 年 3 月（2 年間）

研究課題名：精神障害者に対する作業療法の効果に関する研究

研究代表者

氏名：田中悟郎

所属：長崎大学医学部保健学科

会員番号：2960

研究成果の概要：

- ① 精神科病院療養病棟の長期入院患者に対し退院支援を目的に小集団作業療法を実施した。退院への気持ちが揺れやすい患者の意識を高める上で、地域で生活している退院患者とのふれあい活動が重要なことが示唆された。
- ② 長期入院統合失調症患者の退院意識には、自信のなさ、家族への受け入れへの期待、必要な社会資源数が関連していた。
- ③ 精神科救急病棟における統合失調症患者への個人作業療法の実施は、陰性症状及び心気症状の改善に影響を及ぼしている可能性が示唆された。

助成金額（円）：500,000 円

キーワード：精神科作業療法、長期入院、統合失調症、退院意識、精神科救急病棟、個人作業療法

研究①精神科病院長期入院患者への退院支援を目的とした小集団作業療法

1. 研究の背景

厚生労働省は平成 16 年に精神保健医療福祉の改革ビジョンとして「入院医療中心から地域生活支援中心へ」という基本方針を公表した。また、社会的入院の解消策の一つとして平成 18 年度に精神障害者退院促進支援事業が国により正式に事業化され全国で実践されている。このような状況を考慮すると、精神科病院長期入院患者の退院支援に寄与する作業療法のあり方を探求することは急務の課題といえる。近年、退院支援において退院患者参加型プログラムの実践が薦められている。

2. 研究の目的

精神科病院長期入院患者を対象に退院患者とのふれあい活動を通じて退院意識を高める支援を行った試みについて報告したい。

3. 研究の方法

対象者は精神科療養病棟において 1 年以上入院している長期入院患者 20 名で、研究期間は平成 18 年 10 月から平成 20 年 3 月ま

でとした。退院支援を主目的に、約 3～6 名程度の小集団作業療法を実施し、週 1 回約 1 時間の活動を 3 ヶ月クールで行った。評価尺度は、精神障害者社会生活評価尺度、地域生活に対する自己効力感尺度、大島らを参考に独自に作成した自記式退院意識調査票を使用し介入前後で評価した。

4. 研究成果

長期にわたり入院生活を送ってきた患者にとって退院は長年住み慣れた居場所を離れることである。これはとても大きな環境の変化であり、退院に消極的になる患者は少なくない。今回このような患者を対象に活動を行ったが、その活動場所はできるだけ地域を利用してみた。まず地域の中に楽しめる場所を見つけることから始め、その後施設訪問へと展開していった。社会資源を実際に「知る、見る、体験する」機会を提供し、何度も繰り返し慣れるまで丁寧に支援を行った。顔見知りとなった先輩患者とレクリエーションなどを媒介にふれあうことを通じて、さまざまな体験談を直接先輩患者から聞く機会を作ったことが患者の興味関心を引き出す上で

特に重要であった。つまり社会資源の情報を職員が一方的に流すのではなく、活動を媒介に利用者との交流に重点を置き、その交流の中で患者が自ら知りたい情報を得ていくことを繰り返すことで初めて情報がきちんと患者に届いていくという実感を持つことができた。

研究②長期入院統合失調症患者の退院に対する意識とその関連要因の分析

1. 研究の背景

精神科病院の長期入院患者の退院支援は精神障害リハビリテーションの重要な役割である。従って、退院支援に寄与できる精神科作業療法のあり方を検討することが急務となっている。退院支援の際にはまず患者の退院への意向を把握することが必要である。これまで実施された長期入院患者の退院に対する意識調査によると退院への意欲は決して小さくないことが報告されている。しかし退院に対する意識に及ぼす社会心理的要因の影響を多変量解析した研究は少ない。

2. 研究の目的

本稿では、精神科病院長期入院者の退院促進に向けての支援のあり方を検討するために、長期入院者の退院に対する意識及びその関連要因を多変量解析により明確にする。

3. 研究の方法

対象者は長崎県内の任意に選択した精神科病院3施設（田川療養所255床、真珠園療養所326床、県精神医療センター141床）に1年以上入院している統合失調症患者で、自記式調査票の内容を理解し回答できる者とした。対象者には3施設の作業療法士が調査の趣旨を文書及び口頭にて説明した後、同意が得られた者に調査票を配布し81名から回答を得た。調査期間は平成18年9月～12月であった。

4. 研究成果

1) 退院積極度

「退院後の社会生活を考えること（退院考慮）」については、「いつも」と「たまに」を合わせると63名（77.7%）が「考える」と回答していた。次に、「退院後考えられる生活の場、日中の活動の場、生活費、相談相手」を尋ねた後に、「条件が揃えば退院したいか（退院希望）」を問うと、「ぜひ」と「迷いがあるが」を合わせると48名（59.2%）が「退院したい」希望を持っていた。さらに、「条件が揃えば退院できるか（退院可能性評価）」を問うと、「すぐにでも」と「多少難しくても」との計42名（51.8%）が「退院できる」と評価していた。つまり、退院考慮、退院希望、退院可能性評価の順に、退院に積極的な姿勢が現れていた。

2) 地域生活イメージと退院積極度

退院後に考えられる「生活の場」としては、

「家族のいる自宅」が約4割で最も多く、次に「一人で暮らすアパート・貸家」であり、これらを選択した者は退院積極度の平均値も高かった。

3) 入院理由と退院積極度

「何となく自信がない」、「家事をしなくていい」、などを選択した人の退院積極度の平均値は、非選択者と比較し有意に低かった。

「何となく自信がない」の選択者は、非選択者と比べ年齢及び入院生活への満足感が有意に高く、家族類型は同胞型が多かった。

4) 社会資源と退院積極度

「働くことについて相談できる場」を「ぜひほしい」または「あった方がよい」と回答した人の退院積極度は「いない」人より有意に高かった。

5) 退院積極度に影響を及ぼす要因

以上取り上げた関連要因の退院積極度に対する独立した影響の大きさを検討するために、退院積極度を従属変数とした重回帰分析を実施した。その結果、退院積極度に対して、「自信のなさ」、「家族のいる自宅希望」、「必要な社会資源数」が他要因と独立して有意な関係が認められた。

研究③精神科救急病棟における統合失調症患者への個人作業療法実施が精神症状に及ぼす影響

1. 研究の背景

近年、精神科急性期医療体制の整備及び入院患者の早期退院の促進に寄与するリハビリテーションの充実が強く求められている。これを受け、日本作業療法士協会は早期作業療法の実践マニュアルを作成し、その普及に努めている。早期作業療法は個人作業療法（作業療法士が患者と1対1の形態で実施）もしくはパラレルな場を利用した作業療法で開始されることが多く、その実践（症例）報告もみられる。しかし、早期作業療法の効果を実証するデータの蓄積は今後の課題となっている。

2. 研究の目的

本研究は、精神科救急病棟に入院している統合失調症患者を対象に、個人作業療法の実施が精神症状に及ぼす影響を調査した。

3. 研究の方法

個人作業療法実施の有無がBPRS得点に及ぼす影響を検討するために、BPRS得点を従属変数、群（個人作業療法実施群・未実施群）及び、時期（入院時・作業療法開始時・退院時）を独立変数とする繰り返しのある2要因の分散分析を行なった。

4. 研究成果

個人作業療法実施群は21名、個人作業療法未実施群は20名であった。対象者の性別、年齢、入院回数、入院日数などの基本属性を表1に示したが、両群間に有意差は認められな

かった。表2に作業療法実施回数の比較結果を示した。パラレルな場を利用した作業療法と病棟内集団作業療法回数に有意差を認めた。次にBPRS得点について分散分析を行なった結果を表3に示す。全項目において評価時期に有意な主効果が認められた。躁症状得点・陰性症状得点・心気症状得点においては、2群間（個人作業療法の有無別）で主効果が認められた。さらに全項目において、有意な交互作用は認められなかった。つまり、両群における得点変化パターンは同じであったと理解される。

5. 文献

研究①精神科病院長期入院患者への退院支援を目的とした小集団作業療法

- 1) 厚生労働省：精神保健医療福祉の改革ビジョン。（オンライン）、入手先 <http://www.mhlw.go.jp/topics/2004/09/tp0902-1.html>, (参照 2009-12-13)。
- 2) 井上新平、安西信雄、池淵恵美・監修：退院準備プログラム。丸善、東京、2006。
- 3) 岩崎晋也、宮内勝、大島巖、村田信夫、野中猛、他：精神障害者社会生活評価尺度の開発—信頼性の検討（第1報）—。精神医学 36:1139-1151, 1994。
- 4) 大石希、大島巖、長直子、榎野葉月、岡伊織、他：精神分裂病者の地域生活に対する自己効力感尺度（SECL）の開発。精神医学 43:727-735, 2001。
- 5) 大島巖、吉住昭、稲沢公一、猪俣好正、岡上和雄：精神病院長期入院者の退院に対する意識とその形成要因—自記式全国調査に基づく分析—。精神医学 38:1248-1256, 1996。

研究②長期入院統合失調症患者の退院に対する意識とその関連要因の分析

- 1) 厚生労働省：精神保健医療福祉の改革ビジョン。
<http://www.mhlw.go.jp/topics/2004/09/tp0902-1.html>。
- 2) 瀬戸屋雄太郎、安西信雄：退院促進のために必要な診療報酬改定。精リハ誌 10:141-147, 2006。
- 3) 安西信雄、瀬戸屋雄太郎：精神保健福祉の動向と社会的入院者の退院問題。OTジャーナル 38:1090-1096, 2004。
- 4) 原田俊樹、佐藤光源、三村興二、長尾卓夫：精神分裂病患者の退院。精神医学 27:1281-1287, 1985。
- 5) 全家連保健福祉研究所：ぜんかれん保健福祉研究所モノグラフ No.9 精神病院における生活環境と分裂病の陰性症状。全国精神障害者家族会連合会, 1994。
- 6) 大島巖、吉住昭、稲沢公一、猪俣好正、

岡上和雄：精神分裂病長期入院者の退院意向と希望する生活様式。病院・地域精神医学 38:558-567, 1996。

- 7) 大島巖、吉住昭、稲沢公一、猪俣好正、岡上和雄：精神病院長期入院者の退院に対する意識とその形成要因—自記式全国調査に基づく分析—。精神医学 38:1248-1256, 1996。
- 8) 菊池謙一郎、新開淑子、小口徹、佐藤忠彦、山内惟光：長期在院の精神分裂病患者の退院の意向とそれに関連する要因について。臨床精神医学 27:563-571, 1998。
- 9) 和田一丸、前田知華、山本将人、小田桐真理子、加藤拓彦、他：入院精神疾患患者における病気、入院生活および退院に関する意識。精神科治療学 19:91-96, 2004。
- 10) 白石弘巳、大原美知子、青木眞策、滝沢武久、石河弘、他：精神保健医療改革と家族—「社会的入院患者」や家族に対する調査をもとに—。精神医学 47:1363-1370, 2005。
- 11) 加藤拓彦、小山内隆生、和田一丸：精神科作業療法を継続している入院統合失調症患者における社会精神医学的側面—結婚と就労を中心に—。弘前医学 57:71-78, 2006。
- 12) 小山内隆生、加藤拓彦、和田一丸：入院統合失調症患者における社会精神医学的側面—退院と精神科作業療法に対する意識を中心に—。弘前医学 58:25-34, 2007。
- 13) 岩崎晋也、宮内勝、大島巖、村田信夫、野中猛、他：精神障害者社会生活評価尺度（LASMI）の開発—信頼性の検討（第1報）—。精神医学 36:1139-1151, 1994。
- 14) 松武久美子、藤田みほり、松田美由紀、前山隆史、藤本澄江、他：精神保健福祉に関連するサービスへのニーズ調査結果。長崎県総合公衆衛生研究会誌 37:20-21, 2005。
- 15) 池淵恵美、佐藤さやか、安西信雄：統合失調症の退院支援を阻む要因について。精神神経学雑誌 110:1007-1022, 2008。
- 16) 井上新平、安西信雄、池淵恵美監修：精神障害を持つ人の退院準備プログラム。丸善、東京、2006。
- 17) 佐藤さやか、池淵恵美、安西信雄、井上新平：退院促進のために必要な心理社会的治療。精リハ誌 10:107-114, 2006。
- 18) 米田正代：大阪府における社会的入院解消研究事業2年間の成果と今後の展望。病院・地域精神医学 45:423-428, 2002。

研究③精神科救急病棟における統合失調症患者への個人作業療法実施が精神症状に及ぼす影響

- 1) 厚生労働省：精神保健医療福祉の改革ビジョン。（オンライン）、入手先 <http://www.mhlw.go.jp/topics/2004/09>

- /tp0902-1.html>, (参照 2010-02-22).
- 2) 日本作業療法士協会：作業療法マニュアル 31 精神障害：身体に働きかける作業療法アプローチ回復段階に沿った治療活動の紹介－. 日本作業療法士協会, 東京, 2006.
 - 3) 日本作業療法士協会：作業療法マニュアル 32 ニューロングステイをつくらない作業療法のコツ. 日本作業療法士協会, 東京, 2006.
 - 4) 山根寛：精神障害と作業療法. 三輪書店, 東京, 2006.
 - 5) 香山明美：個人作業療法と集団作業療法どちらがよいか？－作業療法の実施形態－. 古川宏・編, 作業療法のとらえかた, 文光堂, 東京, pp235-244, 2006
 - 6) 小林正義, 福島佐千恵, 村田早苗：統合失調症の早期作業療法実践のコツ. 作業療法ジャーナル 42:1122-1127, 2008.
 - 7) 小松洋平, 塚原宏恵, 浅野雅子, 山崎京子, 橋本喜次郎：早期退院を視野においた精神科救急病棟におけるリハビリテーション－肥前精神医療センターの取り組み－. 作業療法ジャーナル 41:1095-1102, 2007.
 - 8) 小松洋平, 浅野雅子, 上城憲司, 青山宏：精神科急性期作業療法の経験－作業療法を開始するまでの過程の重要性－. 西九州リハビリテーション研究 2:33-37, 2009.
 - 9) 太田美津子：統合失調症の早期介入事例 1. 作業療法ジャーナル 42:1129-1136, 2008.
 - 10) 田尻威雅：統合失調症の早期介入事例 2－シームレス作業療法：当事者の安心できる入院治療から地域生活まで. 作業療法ジャーナル 42:1138-1142, 2008.
 - 11) 山口光晴, 宇田英幸：精神科急性期治療病棟における作業療法の役割－実践報告－. 作業療法ジャーナル 34:185-189, 2000.
 - 12) 香田真希子, 松尾登志子, 小川ひとみ：女子急性期病棟での作業療法の機能とは－症例を通して－. 作業療法ジャーナル 34:191-195, 2000.
 - 13) 清水由美：急性期精神分裂病に対する作業療法－若年期発症の症例を通して－. 作業療法ジャーナル 34:197-201, 2000.
 - 14) 佐々木文則：精神分裂病の亜急性期での作業療法－症例を通して－. 作業療法ジャーナル 34:203-207, 2000.
 - 15) WHO(融道男, 中根允文, 小見山実監訳)：ICD-10 精神および行動の障害－臨床記述と診断ガイドライン－. 医学書院, 東京, 1993.
 - 16) 北村俊則, 杠岳文, 森田昌宏, 伊藤順一郎, 須賀良一, 他：オックスフォード大学版 BPRS の下位尺度の作成とその妥当性. 精神科診断学 1:101-107, 1990.
 - 17) 厚生労働省：e-ヘルスネット情報提供精神科救急入院料病棟. (オンライン), 入

手 先
<<http://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/dictionary/heart/yk-036.html>>, (参照 2010-02-22).

- 18) 田尻威雅：統合失調症の早期介入事例 2－シームレス作業療法：当事者の安心できる入院治療から地域生活まで－. 作業療法ジャーナル 42:1138-1142, 2008.
- 19) 橋本喜次郎：クリニカルパスによる急性期統合失調症治療－BPRSと薬物療法などの解析－. 精神医学 46:701-707, 2004.

6. 論文掲載情報

- 1) 山上早苗, 川上京子, 山崎結城, 福田健一郎, 田中悟郎：精神科病院長期入院患者への退院支援を目的とした小集団作業療法－退院患者とのふれあい活動の実践－. 作業療法 29:95-104, 2010.
- 2) 大部美咲, 山上早苗, 本村幸永, 山口清美, 田中悟郎：長期入院統合失調症患者の退院に対する意識とその関連要因の分析. 作業療法 29:183-194, 2010.
- 3) 精神科救急病棟における統合失調症患者への個人作業療法実施が精神症状に及ぼす影響. 作業療法 31:203-209, 2012.

7. 研究組織

(1) 研究代表者

氏名：田中悟郎
所属：長崎大学
会員番号：2960

(2) 共同研究者

氏名：稲富宏之
所属：大阪府立大学
会員番号：4967

氏名：小松洋平
所属：西九州大学
会員番号：15491

氏名：福田健一郎
所属：真珠園療養所
会員番号：5173

氏名：本村幸永
所属：長崎県精神医療センター
会員番号：5608

氏名：片田美咲
所属：にしきの里
会員番号：5516

氏名：山口清美
所属：長崎医療技術専門学校

会員番号：8235

氏名：森内（山上）早苗
所属：真珠園療養所
会員番号：23706

氏名：磯野真也
所属：真珠園療養所
会員番号：17265

氏名：村田（山崎）照子
所属：小鳥居諫早病院
会員番号：18427

氏名：山崎結城
所属：真珠園療養所
会員番号：21045

氏名：江口友紀
所属：真珠園療養所
会員番号：21371

氏名：川上京子
所属：真珠園療養所
会員番号：27416

氏名：比嘉由里子
所属：
会員番号：27417

氏名：川添奈々
所属：
会員番号：23705

氏名：御手洗令美
所属：真珠園療養所
会員番号：23496

氏名：佐久間聡美
所属：日見中央病院
会員番号：12820

氏名：坂井美香
所属：鈴木病院
会員番号：22698